

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援・放課後等デイサービス HUGS		
○保護者評価実施期間	令和 7年 3月 1日		～ 令和 7年 3月 15日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数) 16
○従業者評価実施期間	令和 7年 3月 1日		～ 令和 7年 3月 15日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 10
○事業者向け自己評価表作成日	令和 7年 3月 31日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	楽しく通所できる多彩な活動プログラムを設定し、丁寧できめ細かい対応	“静”、“動”を合わせながら活動を設定し、充実した余暇(放課後)が過ごせるようにプログラムを行っている。担当制を設けず、保育士、児童指導員(教員、社会福祉士)、看護職員などの全職員が多方面から支援に関わることで、子ども・保護者との信頼関係を築いている。実際の生活場面で活かせる発達支援を行っている。	職員の雇用の継続性を高め、子ども・保護者との信頼関係を構築し、安心して通所できる環境づくりに取り組む。子どもの意思形成・意思表示が更に出来るようにしていく。
2	子どもの発達、ニーズ(医療ケア)に応じた支援体制	医療的ケアが必要な子どもに対して、看護職員を配置して対応している。重症心身障害の子ども、不登校の子どもなど、困難ケースや家庭では取り組みにくい課題に対応している。各制度の狭間の子どもへ丁寧に関わり、それぞれのニーズに応じて柔軟に対応している。	学校や役所、相談支援事業所、併用事業所、リハビリ機関など、各機関と連携を強化していく。成長に合わせた支援方法を模索し、子どもの力を伸ばせるように、過剰な支援(補助)にならないように、“きっかけを与えて待つ支援”を行う。
3	児童発達支援との多機能を利用した継続的な支援体制と、異年齢同士でのコミュニケーション、居場所の獲得	学校や家庭でない、第3の場所として安心して過ごせる空間・環境作りを意識している。異年齢が同時に活動することで、多様性を受け入れ、人とのコミュニケーションが自然と身に付く支援を実施している。	たくさんの人との関わりから、相手を理解・尊重する機会を多く持ち、気持ちの成長を促す取り組みを行う。また、集団の中で役割を果たすことで、自己肯定感を高めていける支援を行っていく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	各リハビリ専門職による支援体制	子どもの発達に合わせた専門職(作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、心理士)による支援が求められているが、現段階では人員の確保が出来ていない。	現状は、各専門機関での取り組みを事業所で取り入れている状況であるため、人員確保が出来るまでは、それらを継続して行う。
2	放課後児童クラブや児童館との交流や、地域の他の子どもと活動する機会の確保	学校までの距離が遠い児童が多いため、時間の確保が難しいと共に保護者ニーズがない。公園等で一緒になった時は共に活動することもあるが、配慮のいる子どもに目が届きにくくなる恐れもあり、積極的に実施できていない。	一緒に活動できるイベントを企画・開催することで、地域の子どもを含めた住民や商店・企業様との合同活動を持てるように取り組む。
3	家族の対応力の向上を図るための、家族等の参加できる研修の機会や情報提供等の実施	特性、困りごと、ニーズが様々であり、課題も多様であることから、小集団でのペアレントトレーニングの実施は難しく、個別に相談・助言をする機会になっている。	ペアレントトレーニングの専門知識を持つ職員が不足しているため、研修等を実施して個別ケースに対応できる人材を増やしていく。